2003.1.25.SPSN 第 40 回研究会（2012.2.16.追記）
上村泰裕（東京大学社会科学研究所）

Harold L. Wilensky 教授年譜

1923 年（０歳）3 月 3 日、ニューヨーク州 New Rochelle に生まれる。3 人兄弟の末子。父母は、それぞれ 17 歳と 12 歳のときにロシアのポーランド国境付近から移住してきたユダヤ人で、小さな食料品店を経営。

1929 年（６歳）大恐慌で家業の食料品店が倒産し、貧困を経験。

1935 年（12 歳）コネティカット州 Norwalk に移住。

1940 年（17 歳）バーモント州の Goddard College で働きながら学ぶ。工場、建設現場、販売、トラック運転手などの仕事をする。ヴェブレン、オーウェルなどを読む。

1941 年（18 歳）米国海員組合で働く。

1942 年（19 歳）オハイオ州の Antioch College に転学。デトロイトの全米自動車組合（UAW-CIO）で研究助手として働く。空軍入隊。B-17 のパイロットとして、キューバからフロリダの将校クラブにラム酒を空輸。従軍中、フランツ・ノイマン『ビヒモス』（1942）を読む。

1945 年（22 歳）Antioch College に復学（～47 年）。有権者調査研究所で投票行動の分析に従事（～46 年）。

1947 年（24 歳）オハイオ州 CIO 評議会のロビイストとして働く。Antioch College 卒業後、カーネギー財団後援の労組指導者訓練プロジェクト（シカゴ大学）の常勤スタッフとなる。前任者の勧めにより、かたわらシカゴ大学社会学部の大学院で学ぶ。はじめ経済学部の門を敲くが、若きミルトン・フリードマン助教授に既読書を問われ、「ヴェブレン、マンハイム、マルクス、ラスキ、J.S.ミル、アダム・スミス、ヴェーバー、シュンペーター、ノイマン」と答えたところ「君は経済学者じゃない、社会学者だ」と言われ、社会学に転向。同期にゴフマン、コーンハウザー、ハワード・ベッカー。

「シカゴ学派の特徴的な強みは…、一次観察を重視すること、理論と経験観察と公共政策の相互作用への変わらぬ関心、近代都市産業社会のかたちについての継続的な調査、社会的・経済的・政治的な構造――そのなかで個人が奮闘する――への注目、それに、どの方法を選ぶかはどんな実質的問題を解こうとするかによるのであり、その逆ではないという確信である。」
（Wilensky1997:311）

「その言わんとするところは、《君が研究する人々の生活にふれなさい。学者仲間だけでだべっていないで、つねに社会的・政治的なリアリティに根ざしていなさい》ということだった。」(ibid.:312)

「シカゴ学派の第二の強みは、それが学際的――各学科の代表が交渉して最小公分母を決める恐ろしい会議などではなく、それぞれの学問に徹底的に根ざした学者たちが、学科の制約よりも自分の研究課題の必要に導かれて集うという意味での――だったことである。」(ibid.)

1954 年（31 歳）シカゴ大学の助手（Assistant Professor）を３年間務めた後、ジャノヴィッツらの誘いによりミシガン大学社会学部助教授に就任。大衆社会論の経験的検証に取り組む。『労使関係――読書と調査の案内』刊。

「シカゴで学んだ貴重な教え、それは――研究に値する問題、調査に値する課題、実証に値する理論を探すことのほうが、学科の区分や方法や技術よりも大切であり、もっといえば答えそのものよりも大切だということだった。一方、ミシガンの８年間で学んだのは、ほんの少しの想像力があれば、ほとんどいかなる概念でも測定可能になり、ほとんどいかなる命題でも検証可能になるということだった。」(Wilensky1997:314)

1955 年（32 歳）シカゴ大学より博士号（社会学）を授与される。

1956 年（33 歳）行動科学高等研究センターで研究（～57 年)。『労働組合のなかの知識人――専門家役割に対する組織の圧力』(博士論文）刊。

1958 年（35 歳)『産業社会と社会福祉――産業化がアメリカの社会福祉サービスの供給と組織に与えた影響』刊（ルボーとの共著。四方寿雄監訳，1971 年)。

1961 年（38 歳）論文「社会構造・ポピュラー文化・大衆行動」。

1962 年（39 歳）行動科学高等研究センターで研究（～63 年)。

1963 年（40 歳）カリフォルニア大学バークレー校教授に就任。

1964 年（41 歳）論文「大衆社会と大衆文化――相関か独立か」。

1967 年（44 歳)『組織のインテリジェンス――政策決定における知識の役割』刊（市川統洋ほか訳，1972 年)。『社会学の使い方』刊（ラザースフェルドらと共編)。

1970 年（47 歳）*Rich Democracies* に結実することになる研究プロジェクトを開始。以来、15 か国でフィールドワークを行ない、400 人以上の政治家・官僚・労使代表などにインタビューする。

1975 年（52 歳)『福祉国家と平等――公共支出の構造的・イデオロギー的起源』刊（下平好博訳，1984 年)。

1976 年（53 歳）『「新しいコーポラティズム」・集権化・福祉国家』刊。

1981 年（58 歳）論文「民主的コーポラティズム・合意・社会政策――価値観の変化と福祉国家の《危機》についての省察」（ＯＥＣＤ編『福祉国家の危機』所収）。論文「左派・カトリシズム・民主的コーポラティズム」。

1983 年（60 歳）カリフォルニア大学バークレー校教授を退官、名誉教授となる。

1985 年（62 歳）『比較社会政策――理論・方法・発見』刊（共著）。

1987 年（64 歳）米国学士院会員に推挙される。『民主的コーポラティズムと政策連携――８か国における産業政策・労働市場政策・所得政策・社会政策の相関』刊（ターナーとの共著）。

1990 年（67 歳）論文「共通の問題、異なる政策――18 か国の家族政策研究」。

1991 年（68 歳）大火で自宅を焼かれ、完成に近づいていた *Rich Democracies* の草稿の大半、蔵書、ファイル、ノートなどを失う。修復に８年を費やす。

1993 年（70 歳）論文「国民国家・社会政策・経済パフォーマンス」。

1997 年（74 歳）自伝的論文「社会科学の旅」（Hans Daalder ed., *Comparative European Politics: The Story of a Profession* 所収）。

「私の研究の成功と失敗、それから社会科学を勉強している大学院生が壁にぶつかるのを見てきた経験にもとづいて、誰かの役に立つかもしれない教訓をいくつか引き出しておこう。……
①〈量的 vs.質的〉〈実証的 vs.人文的〉という、人を誤らせる２つの二分法を避けよ。……
②《民主的コーポラティズムは崩壊しつつある》《アメリカの民主主義は分極化し、麻痺している》といった、各システム内部のひずみを研究する場合には、システム間の比較を試みよ。……
③問題を追いかけよ、学科や分野の仕切りは越境すべし。……
④知的な熱狂や流行に対する免疫を身につけよ。……」（Wilensky1997:324）

2002 年（79 歳）『豊かな民主主義諸国――政治経済・公共政策・パフォーマンス』刊。

2011 年（88 歳）10 月 30 日、前立腺癌のため逝去。逝去の 9 日前に遺著の校正を終えた。

2012 年、遺著『グローバルな視座からみたアメリカの政治経済』刊。

Berkeley Faculty, Live!（1987 年 10 月 12 日のインタビュー・ビデオ）
http://sociology.berkeley.edu/facultylive/movies/Wilensky.wmv
Conversation with Harold Wilensky（2002 年 10 月 29 日）
http://globetrotter.berkeley.edu/people2/Wilensky/wilensky-con0.html

Dear Dr. Kamimura:

I am touched by your interest in my work - - and by Professor Shimodaira's efforts as well. I am delighted that my new book is being reviewed in Tokyo.

My year of birth is 1923.

With all good wishes,

Harold L. Wilensky

==========

Harold Wilensky
Department of Political Science
210 Barrows Hall
University of California-Berkeley
Berkeley, CA 94720